

キャンプ事前調査結果についての 一考察 特に参加の動機と期待についての親子の比較を中心に

○上野 幸 山崎 律子
(柳余暇問題研究所)

高橋 和敏 川向 妙子
(東海大学)

I はじめに

北米における組織キャンプは、1861年に実施されて以来既に120年以上の歴史をもつに至っている。それに比べ日本においては、1920(大正9)年の少年キャンプが最初の組織キャンプといわれ⁽¹⁾⁽²⁾、その歴史も60年と比較的浅い。

しかしながら、現代の科学技術の発展や経済成長に伴う急激な社会変化は、人々の野外志向を高め、キャンプをはじめ、各種の野外活動を活性化してきたことは、周知のところである。最近では、幼少児から成人、高齢者までの年齢層にまたがり、かつさまざまなタイプのキャンプが実施されるようになってきた(多様化)。また、夏期に止まらず、他の季節においてもキャンプが企画され、その参加数も増大し、キャンプ経験者も増加してきた(大衆化)。

さらに、主催団体なども従来までは、主として公共・非営利団体・学校によるものであったが、それに加え現在は、営利団体主催の組織キャンプも増加し、その規模も拡大しつつあることが注目される(競争化)。

このような多様化、大衆化、競争化は、組織キャンプの発展にとって、極めて重要な現象であるといえよう。すなわち、参加者にとっては、多くの選択機会をもち得ることとなり、個人のニーズと興味にあったキャンプに参加できる可能性が増加する。一方、組織キャンプを主催する団体・個人にとっては、十分なPRを行なうことと共に、参加者の期待にこたえ得る企画と指導が必要となってくる。

組織キャンプ(とくに青少年対象のキャンプ)において、その教育的価値を高めるための条件のひとつに、主催者、指導者、親、参加者のそれぞれの目的・興味・期待が融合された企画が必要なことは、古くはDimockやHendryが主張している⁽³⁾。その中でも、とくに親や参加する子供がどのような動機で、何を期待して参加させ、あるいは参加するのかを、明確に把握することが重要であると思われる。

この研究は、このような観点から、本来的には実践の場において、指導に直接参考にするための資料収集をねらいとしていた。しかし、年ごとに行なっているため、その傾向も見出すことができたのを機に、とくに、親子の比較を中心にすすめることにした。

キャンプに関する研究も、数多く発表されてきたが、研究対象に母親を選んだものは数少ない⁽⁴⁾。さらに、両者(参加者とその親)に関する研究は見当らない。したがって、この研究は、この側面に焦点をあて、その動機と期待を解明することによって、適切な募集方法、プログラム立案、指導への示唆を得ることをねらいとした。

II 研究の目的

この研究の目的は、前述したように、直接、指導の参考に

するために調査した資料から、とくに動機と期待について、過去3年間の傾向を下記の項目にしたがって把握することである。すなわち：

1. 親が子供をキャンプに送るに当たっての動機
 2. 参加者自身が考える参加の動機
 3. 親の子供に対する期待
 4. 参加者自身の期待
 5. 動機と期待についての両者の比較
- 動機の把握
期待の把握

III 本研究の背景

1. 調査対象のキャンプ

「グアム海岸教室」と呼称され、昭和51年から、春期・夏期の年2回行なっている。約一週間のキャンプで、ホテルに宿泊し、主として外国経験、南国の自然体験、海を中心とした自然観察、スノーケリングなどを実施している。参加対象者は、小学校3年から中学校3年までで全国の地域で募っている。昭和60年夏期で17回目をむかえた。

2. 調査全体の概要

(1) 親に対しての調査設計

「海外旅行経験」「健康状態」「食事や嗜好」「興味・遊び」「行動・性格・泳力」「動機・期待・留意点」

(2) 参加者に対しての調査設計

「食事習慣の嗜好」「テレビの興味と遊び」「勉強習慣と泳力」「健康状態」「動機・期待」

IV 研究の方法と分析

1. 調査対象

グアム海岸教室の参加者で、小学校3年生から中学校3年生の男女及びその親

2. 調査方法

(1) 参加者の親に対しては、「出発の前に」と題するパンフレットの中に調査票を入れ、参加費納入時に提出するようにした。

(2) 参加者に対しては、各グループ毎で成田空港集合時に配布し、その場で記入させ、回収した。

(1)、(2)共に質問紙法によるものである。

3. 調査期日

昭和57年夏期-7月25日~8月 2日
58年春期-3月24日~4月 5日
夏期-7月25日~8月 9日
59年春期-3月23日~4月 1日
夏期-7月21日~8月11日

4. 回収標本数

回収標本数及びその構成は表1のとおりである。学年は小学校3・4年、5・6年、中学校の3ブロックに分けて行なった。

5. 標本の基本的属性

(1) 兄弟関係について

兄弟については、2人が最も多く、約半数(49.7%)を占めている。また、その中でも男1人女1人が多く(25.2%)、次に女2人が多い(12.3%)結果となっている(図1)。

(2) 海外旅行経験について

海外旅行の経験については、年々増加の傾向にある。3年間まとめると、経験のある者が11.8%、未経験の者が88.2%となっている。(図2)

表1 標本の構成 (人数)

性別	学年	小学校		中学校	合計
		3・4	5・6		
男	57年	27	20	19	74
	58年	40	63	28	119
	59年	36	78	27	140
	計	102	159	72	333
女	57年	19	36	11	65
	58年	32	50	21	103
	59年	37	64	16	107
	計	88	139	48	275
合計		190	298	120	808

V 結果と考察

1. 親が子供にキャンプに送るに当たっての動機(図3)

(1) 昭和57年について

全体的には、「かねがね行かせたいと思っていたから」、「自分から行きたいと言ったから」、「海洋教室の内容がよいと思ったから」の3つの動機に集中している。

男女別にみると、男子は「かねがね行かせたいと思っていたから」が多く(44.6%)女子は「自分から行きたいと言ったから」が多い(52.5%)。この結果から、女子は子供の希望によって参加させているものが多く、男子は親の希望によるものが多い。

学年別にみると、中学生は「かねがね行かせたいと思っていたから」が多い(43.3%)のに対し、小学生は圧倒的に「自分から行きたいと言ったから」が多い(小5・6-55.6%、小3・4-65.2%)。このことから、中学生は親の希望によるものが多い、小学生は子供自身の希望によるものが多い。また、「海洋教室の内容がよいと思ったから」も共通して多い。(中学-30.0%、小5・6-42.9%、小3・4-41.3%)

(2) 昭和58年について

男女別にみると、男子は「自分から行きたいと言ったから」が多く(41.2%)、「かねがね行かせたいと思っていたから」と「マスコミで知ったから」が同数になっており(33.6%)、次に「海洋教室の内容がよいと思ったから」(32.8%)という結果になっている。女子も順位は男子とほとんど変わらないが、「自分から行きたいと言ったから」が圧倒的に多く(57.3%)、「マスコミで知ったから」は比較的少ない(20.4%)。

学年別にみると、やはり、「自分から行きたいと言ったから」が最も多く、しかも低学年になるほど多くなっている(中学-38.3%、小5・6-44.7%、小3・4-61.1%)。

(3) 昭和59年について

男女別にみると、男子は「かねがね行かせたいと思っていたから」が多い(47.9%)のに対し、女子は「自分から行きたいと言ったから」が多く(48.6%)となっている。この結果から、男子は親の希望によるものが多い、女子は子供の希望によるものが多い。

学年別にみると、全体的に共通して「かねがね行かせたいと思っていたから」、「自分から行きたいと言ったから」、「海洋教室の内容がよいと思ったから」の3つの動機に集中している。しかし、中学生と小3・4年生は「かねがね行かせたいと思っていたから」が最も多く(中学-51.2%、小3・4-47.2%)、小学5・6年生は「自分から行きたいと言ったから」が最も多い(47.7%)。

2. 参加者自身が考える参加の動機(図4)

(1) 昭和57年について

男女別にみると、男子は「父母にすすめられて」が最も多く(40.5%)、次に「自分で行きたいと思った」(36.5%)、「外国に行ってみよう」(33.8%)となっている。それに対し、女子は「自分で行きたいと思った」が圧倒的

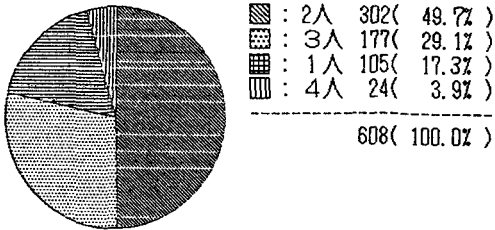


図1 兄弟数(昭和57年-59年)

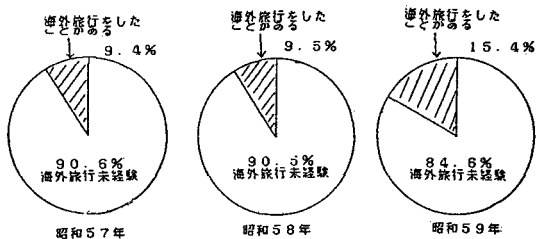


図2 海外旅行経験の有無

6. 分析の方法

集計方法は単純集計で、年度別、男女別、学年別に行なった。学年別は表1のように3ブロックに分けた。分析は集計結果をもとに、各項目100%比によって行ない、考察した。

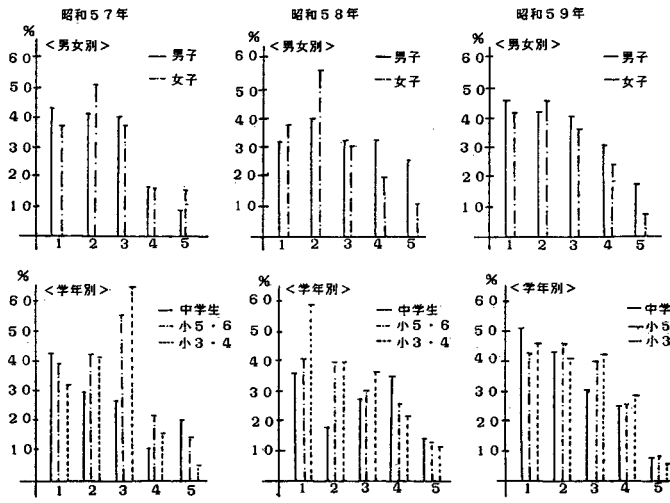


図3 親が子どもをキャンプに送るに当たった動機(図の中の番号は下記の項目を表わす)
 1, かねがね行かせたいと思っていた 2, 自分から行きたいと思った
 3, 海洋教室の内容が良いから 4, マスコミで知ったから
 5, 知り合いのおおさんがいくから

に多く(75.4%)、次に「外国に行ってみよう」(47.7%)となっており、「父母にすすめられて」は「楽しそうだから」と同数で3番目に多い結果となっている(36.9%)。この結果から、男子は親のすすめによるものが多く、女子は自分の希望によるものが多い。

学年別にみると、共通して「自分で行きたいと思った」が多く(中学-53.3%、小5・6-60.3%、小3・4-47.8%)、その他は、「外国に行ってみよう」「父母にすすめられて」が多い。

(2) 昭和58年について

男女共に、「自分で行きたいと思った」が最も多い(男子-47.9%、女子-55.3%)。その他は、「外国に行ってみよう」(男子-37.0%、女子-28.2%)、「父母にすすめられて」(男子-36.1%、女子-33.0%)、「海洋教室が楽しそう」(男子-23.5%、女子-26.2%)に集中している。

学年別にみると、やはり「自分で行きたいと思った」が共通して多く(中学-42.6%、小5・6-53.4%、小3・4-54.2%)、低学年になるほど多い傾向にある。

(3) 昭和59年について

男女共に、「自分で行きたいと思った」が多く(男子-55.7%、女子-65.4%)、「外国に行ってみよう」も比較的多くなっている(男子-50.7%、女子-45.8%)。

学年別にみても、「自分から行きたいと思った」(中学-48.8%、小5・6-62.1%、小3・4-62.5%)が共通して最も多く、「外国に行ってみよう」も同様に多くなっている(中学-51.2%、小5・6-50.0%、小3・4-50.0%、小3・4-44.4%)。

この結果から、全体的に子ども自身の希望によるものが

多く、特に小学生が多い。

3. 親の子どもに対する期待(図5)

(1) 昭和57年について

男女共に「集団生活になれさせたい」(男子-23.0%、女子-23.1%)と「独立心、自立心を身につけさせたい」(男子-14.9%、女子-26.2%)が多い。また、女子は「積極性を身につけさせたい」が比較的多い(15.4%)が、男子は少ない(6.8%)。

学年別にみると、「集団生活になれさせたい」(中学-13.3%、小5・6-27.0%)、「外国での生活体験で視野を広げさせたい」(中学-13.3%、小5・6-9.5%、小3・4-13.0%)が共通して多い。また、小学生には「独立心・自立心を身につけさせたい」が多い(小5・6-23.8%、小3・4-23.9%)。

(2) 昭和58年について

男女共に「独立心・自立心を身につけさせたい」(男子-23.5%、女子-18.4%)、「集団生活になれさせたい」(男子-21.8%

、女子-21.4%)、「外国での生活体験で視野を広げさせたい」(男子-20.2%、女子-15.5%)の3つの期待に集中している。

学年別についても、ほとんど同じような傾向で、全体的に前述の3つの期待に集中している。

(3) 昭和59年について

男女共に、「独立心・自立心を身につけさせたい」(男子-35.0%、女子-19.6%)、「集団生活になれさせたい」(男子-21.4%、女子-15.9%)、「外国での生活体験で視野を広げさせたい」(男子-17.9%、女子-27.1%)の3つの期待に集中している。

学年別に関しても、共通して同じ傾向になっている。ただし、小学生には、「友だちをつくり仲良くさせたい」という期待が少しでている。

4. 参加者自身の期待(図6)

(1) 昭和57年について

男女とも共通していることは、「海で泳ぎたい」(男子-64.9%、女子-60.0%)と「新しい友だちをつくること」(男子-47.3%、女子-61.5%)の2つである。その他、男子は「キャンプができる」(47.3%)と「外国のおみやげを買う」(40.5%)も多く、女子は「外国生活ができる」(50.8%)と「グアムの人と友だちになる」(56.9%)が多い。

学年別にみると、「海で泳ぎたい」「外国生活ができること」「新しい友だちをつくること」の3つが多く、共通している。また、中学生は「英語で話してみたい」(33.3%)がでており、小学生は「キャンプができる」(小5・6-39.7%、小3・4-39.1%)ことや「外国のおみやげを買う」(小5・6-38.1%)ことにも期待がある

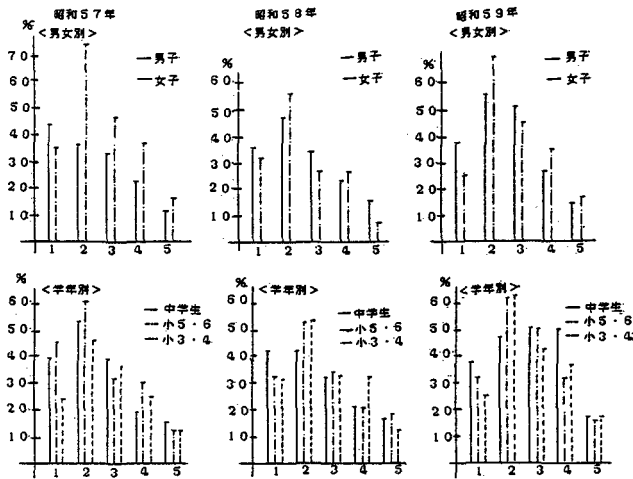


図4 参加者自身が考える参加の動機(図の中の番号は下記の項目を指す)
 1, 父母にすすめられて 2, 自分で行きたいと思った 3, 外国に行きたい
 4, 楽しそうだから 5, 海の国に行きたい

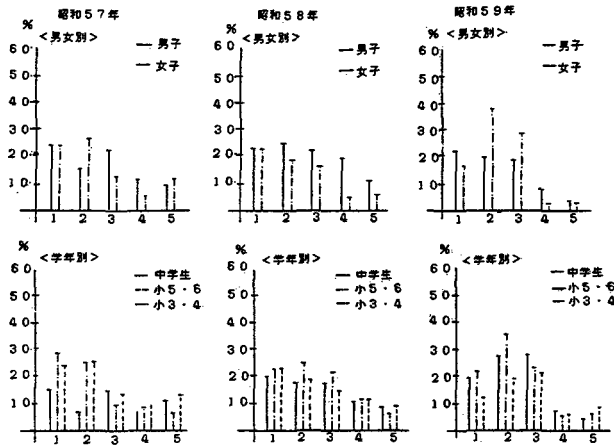


図5 親の子どもに対する期待(図の中の番号は下記の項目を指す)
 1, 異国生活に慣れさせたい 2, 独立心、自立心を身につけさせたい
 3, 外国での生活体験で視野を広げさせたい 4, 新しい体験で成長させたい
 5, 親元を離れての生活をさせたい

ようである。

(2) 昭和58年について

男女共に、「海で泳ぎたい(男子-60.5%, 女子-57.3%)」、「新しい友だちをつくる」(男子-40.3%, 女子-51.5%)「外国生活ができる」(男子-34.5%, 女子-44.7%)が多い。しかし、男子は「外国のおみやげを買う」(31.9%)ことや「キャンプができる」

(39.8%)ことに期待しているのに対し、女子は「グアムの人と友だちになる」(39.8%)ことへの期待の方が大きいようである。

学年別にみても、ほとんど同じ傾向がみられる。中学生には「英語で話したい」(25.5%)という期待がでてきている。

(3) 昭和59年について

男女共に「海で泳ぎたい」(男子-75.0%, 女子-72.0%)と「新しい友だちをつくる」(男子-55.0%, 女子-72.9%)が圧倒的に多い。また、「外国生活ができる」と「グアムの人と友だちになる」ことも40%前後となっている。男子については、「外国のおみやげを買う」も多い(37.9%)。

学年別にみても、前述の4つの期待に集中している。中学生は「英語で話したい」も多く(39.5%)、小学5・6年生は、「外国のおみやげを買う」、小学3・4年生は、「キャンプができる」もそれぞれ30%以上が期待している。

5. 動機と期待についての両者の比較

(1) 動機について

親と子どもで共通していることは、子ども自身の希望によるものが多いということ、特に女子の場合は圧倒的に多い。また、親の行かせたいという希望によるものも多く、これは男子の方が比較的多くなっている。さらに、「海洋教室の内容がよいと思った」(親)と「海洋教室が楽しそうだから」(子ども)も多い。

親については、マスコミの情報や、知人の情報によるもの比較的多いのに対し、子どもについては、外国や南の国に行きたいことによるものが多い。

(2) 期待について

親は子どもをキャンプに参加させることによって、子どもの成長を期待するものが多いのは当然であろう。子どもは海で泳ぐことやグアムの人と友だちになること、英語で話すことなど、実際のプログラムに対する期待が多い。

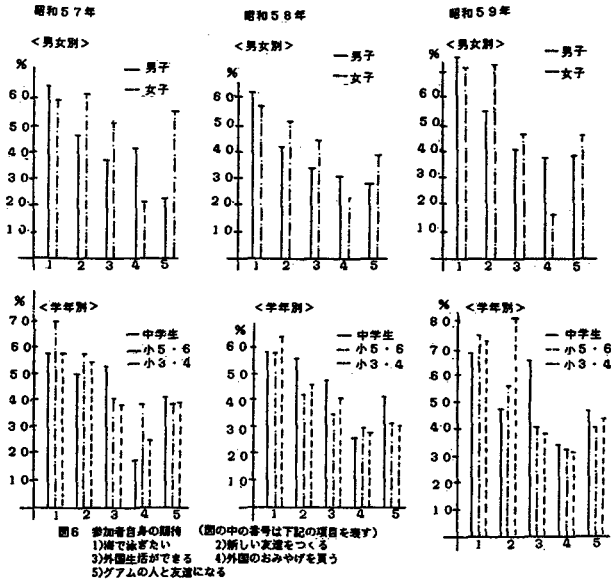
VI まとめ

以上、個々の結果の考察をあげてきたが、全体的に、年度による特別な差異はみられなかった。そこで、3カ年を通して検討すると、次のようなことが言えよう。

1. 動機について(図7、図8)

親の立場からみるならば、女子の親の方が、男子の親よりは「自分から行きたい」という子どもの希望をみたくして

時にそれらの中にある潜在的な動機や期待などを追求していくことが課題となろう。



いるように思われる。また、低学年についても、その傾向が強くなっている。このことは、参加者自身の動機についても、ほぼ同じ結果がでており、親は子どもの意向を大いに取り入れる傾向にあることが何かわれる。それが、親の場合「かねがね行かせたい」ということと一致した時、キャンプ参加が実現できるのであり、主催者にとっては、親への積極的な働きかけが、より必要であることを示唆していると思われる。

2. 期待について (図9、図10)

期待についての一般の特徴は、前述してきたように、親は子どもの成長を願っての期待であり、子どもは、より具体的なプログラムへの期待である。これはもちろん当然であろうが、キャンプにおけるプログラムの実施を通して、いかに親の期待を満足させ得るかが、指導者に課せられた重要な事項を意味している。

親の期待の中での男女差は、あまりみられないが、とくに小学5・6年については、「独立心・自立心をつけさせたい」という期待が、他の学年より強くあらわれていることは注目してよい。総じていえることは、親は、子どもの自立と集団生活、および海外経験に強い期待をかけている。

一方、子どもの場合は、具体的なプログラムへの期待が多く、中でもキャンプ地の地域性に基づいていることから、主眼となるプログラムをより明確に打ち出す必要性を感じさせる。

今回の調査は、全体資料のごく一部分であり、その実態把握に止まった。そして、その傾向の概略を見出したに止まったが、今後は、これを基礎としてさらに個々の項目についての、より具体的なインフォメーションの発見と、同

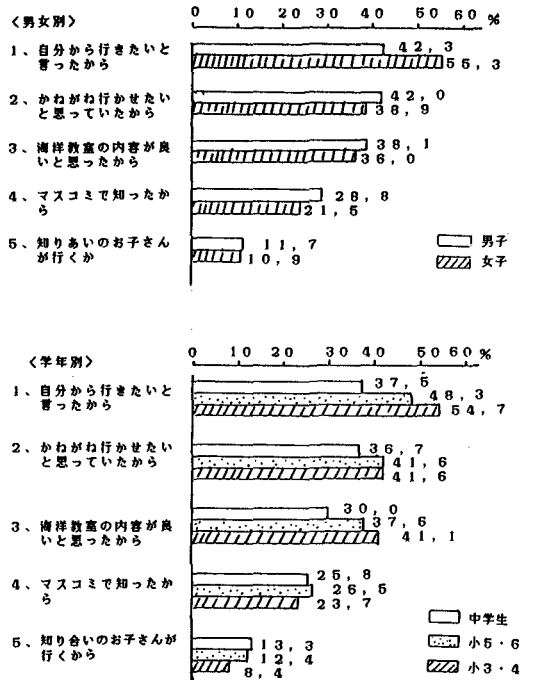


図7 親が子どもをキャンプに送るに当たっての動機 (昭和57年-59年) *数字は人数に対する割合

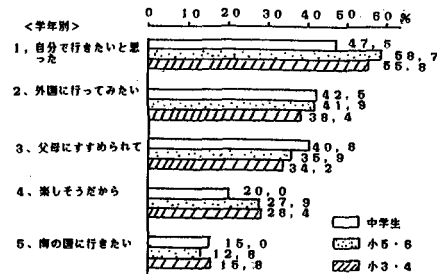
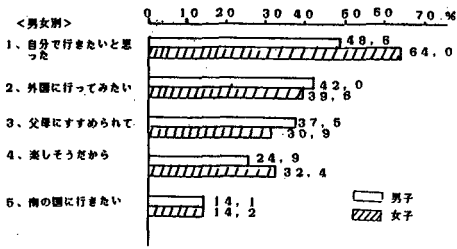


図8 参加者自身が考える動機 (昭和57年-59年)
本数字は人数に対する割合

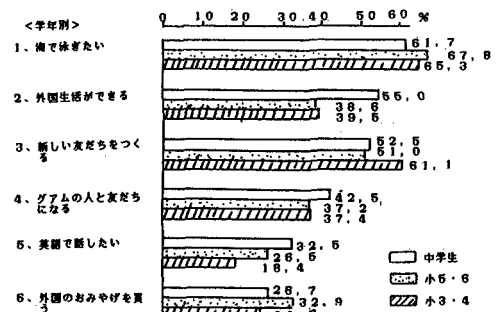
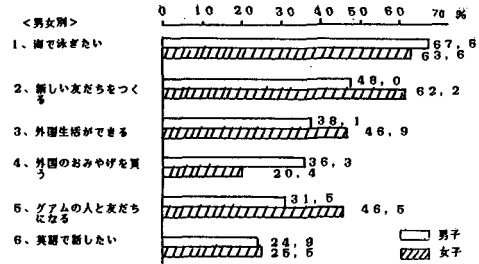


図10 参加者自身の期待 (昭和57年-59年)
本数字は人数に対する割合

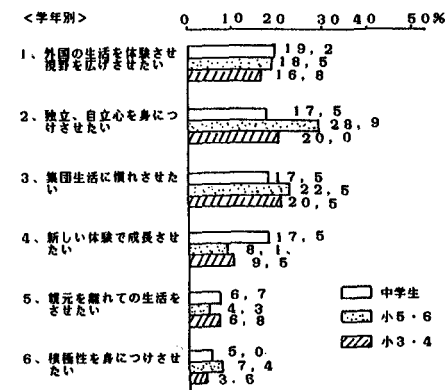
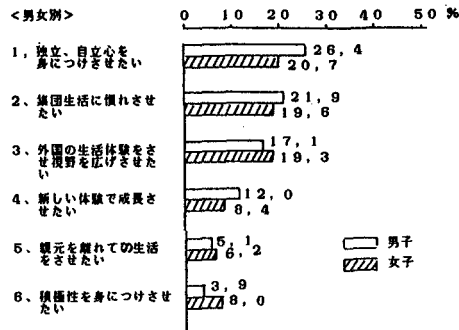


図9 親の子どもに対する期待 (昭和57年-59年)
本数字は人数に対する割合

文献

- 1) 日本キャンプ協会編「キャンプ指導のてびき」
日本キャンプ協会 56年6月25日 P.25-38
- 2) 古閑慶之編著「キャンプ理論と実際」
ミネルヴァ書房 52年8月25日 P.2-4
- 3) Hedley S. Dimock and Charles E. Hendly
「Camping and Character」1929年
- 4) 大森雅之他「日本キャンプ研究の動向」
レクリエーション研究第9号
日本レクリエーション学会 57年3月 P.59-64